博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）伊藤誠賢治

学位申請者　Kathri Achchige Sandunika Hasangani

論　文　名　Virtual construction of the ethnic self: An analysis of the visual framing of in-/out-group perception (of Sinhalese) on social media in Sri Lanka (2009-2018)

本論文は、スリランカのシンハラの人々の言説を分析し、その民族的自己意識の決定要因を探求するものである。分析枠組みとしては、2009年内戦終結以降の時代を扱い、SNS上の言説を中心的な対象とした。民族中心主義は、個人的な性癖といった間主観的な変動性が民族中心主義の位相を決定づけると説明する心理学的観点や、社会的・構造的・外部環境的な要素を強調する社会学的観点を加味しながら、本論文は、特に宗教性と民族中心主義の関係をめぐる議論に注意を払い、「どの程度まで宗教性は民族的な自意識を特徴づけ、集団間の反感を予測させるか」という問いを設定した。より具体的には、SNS上の現れてきた表象としての言説やイメージを、民族的誇りや不寛容の観点から分類し、さらに脅威、宗教性、陰謀論の説明要素に着目して、解析した。

こうした分析の結果、本論文は、第一に、シンハラ人たちは民族的な誇りを強く持っているが、その誇りは脅威・宗教性・陰謀論とは相関性をあまり持っていないことを明らかにした。第二に、覚知された脅威が、不寛容と大きく関わっていると言えることを明らかにした。第三に、宗教性が不寛容を予測させる程度は低いが、脅威や陰謀論と重なる場合には、相乗効果があることを明らかにした。

こうした分析は、あくまでもSNS上の表象を対象としたもので、必ずしもオンライン上の世界の外の現実を正確に反映したものではないという制約はあるものの、本論文は、次のように結論づける。シンハラ人によって構築される自己意識は、必ずしも単純に「宗教的なシンハラ人」というようなものではなく、宗教性は集団間の不寛容の主要な要因ではない。むしろ物理的・象徴的な脅威の覚知が、シンハラ人の自己意識に強く影響し、特に彼らの別の集団に対する不寛容に強く影響している。

本論文の学術的意義は、スリランカにおける民族集団間の不寛容という大きな現象に対して、SNS上の表象を対象にした分析を通じて、一つの体系的な洞察を加えるという点にある。このテーマは、現実の政策課題にも直結し、既存の学術研究でも繰り返し取り上げられてきたものであるが、本論文はそれらの成果を踏まえたうえで、新たな独自の貢献を果たしている。本論文が提供した分析の着眼点は、先行研究の成果を基盤にしつつも、先

行研究では扱われていない斬新なものであり、独創的である。実際の分析手法は、堅実な統計分析であり、多大で地道な作業を要するものであり、価値が高い。SNS 上の表象の分析という点で、再現可能性に限界があり、その点は一つの制約となったが、理解できる限界であり、その限界を踏まえたうえで研究成果をまとめあげたことは、評価に値する。分析手法は、全体として、学術的に満足のできる水準にある。明確な問いとそれに対応した発見にもとづく結論を導き出しているが、他の研究で参照するに値する意義あるものである。独自の着眼的を生かした同様の分析手法は、他の研究でも応用が可能であると思われ、研究の発展可能性は高い。

論述のスタイルについては、やや技巧的な表現の面で改善の余地が見られる点が散見した。ただし議論の構成自体は、体系的で明確な一貫性を持ったものであり、表現面での改善の余地は、論文全体の評価としては微細なレベルにとどまる。

2019 年 7 月 9 日に、審査員全員が出席する中、博士論文審査会が開催された。冒頭で論文提出者から、論文の概要及び独自の貢献の要点などが、簡潔かつ十分な形で、報告された。その後、論文の内容について、審査委員から様々な質問が出された。スリランカにおける SNS 上の言説やイメージを分析する手法に関する質問、研究の含意や発展可能性に関する質問が多くなされた。それらのいずれに対しても、論文提出者からは論理的で適切な対応がなされ、関連する基礎的知識や最先端の知識を持ち合わせていることも示された。審査員の質問は、いずれも論文の学術的意義を損なうものではなかった。また研究の発展可能性についても、論文提出者から妥当な見通しが示され、研究者としての資質も感じさせた。これらの点をふまえて、審査会終了後に、審査員全員一致で、合格の判定を行うことが決せられた。